

中村素堂

このごろの家は、ガラスの使われた箇所がいかにも多い。私の家もご多聞に洩れずまことにガラス障子などが多い。したがって家庭でその補修というわけに行かないので困ることがある。

荷物を持ち込んだ人の粗忽で、北窓のガラスを壊した時、ふと近所に最近出来たばかりのガラス屋を思い出し、かけつけて入れ換えを頼んだ。二分の一メートルに一メートルくらいの一枚を入れる切り合わせに、チョツチョツとしるしをつけて、全然定規も使わずに一気にガラスを切つて、寸分の違いもなく入れ換えて行つた。

まだ二十六歳だという。その青年の技術に見とれて、「実に見事ですすね!」と感嘆してしまつた。すると、「しかし他に何も芸がないんです。ただガラスを切るくらいいなんですヨ」と謙虚に答えて、代金を受け取ると、「またお願いします!」と月並みの礼をいって、さっさと帰つて行つた。

五、六年奉公して、このごろやつと独立、ほんのガラス二、三十枚に定規、自転車一台で始めたこの店は、わずか二年の間に物置きを増築し、電話を引き、貨物自動車一台を持って、店中ガラスでいっぱい盛況に発展して行つた。

朝夕この店の前を通りながら、私はこの青年をひそかに祝福し、そのひとつのものに打ち込んで邁進する者の姿をありありと見つめて、貴いことだと家人達とも話していた。ところが青年主人は、つい先日夕方、店の近くの西武鉄道の踏切で自動車ぐるみ電車と衝突して即死してしまつた。

私は人ごとと思えず悲しい思いをし、かえりみて自分がひそかにこの青年主人を敬愛していたんだと驚きもした。

こんなめでたくもない話を持ち出したのは、私がこのガラス屋から、「他に芸はないんですヨ!」と、立派な腕を誇りもしないで、

かえつてハニかんでいた時に、古人の「為さざる所あり」という詞を思い出し、一事を能く成す人の、余事をかえりみずに専心する信念の反面を表した強い言葉として、長い間自分にいい聞かせて来たものを、ゆくりなく市井の青年ガラス屋さん実践しきつているのを見つけたからである。

人間やりたいことが多く、楽しみたいことも多い。しかしそれを見な思う通りに遂げ得られる人は、よほどの天分、幸運に恵まれた人であろう。何が自分の米の飯のように、あるいはパンのように飽きずに続けて行けることであろうか、と考えて生涯を貫いて楽しめるものを見出し得た人は、随分幸いな人だと思ふ。

そしてその見出し得た自分に適つた楽しみを、限りなく守り研鑽した果てのものを思うと、われわれの書道会にもいま盛んに活躍していられる先輩たちに、この多くの実見本を発見し、敬慕と後悔とを感じることが多い。

〔「乾惕」昭和三十六年〕

〔筆間雑記〕中村素堂随筆集昭和六十三年刊より転載。



【紅塵飛碧海】昭和41年

